

浄土

monthly JODO

法然上人鑽仰会

2017
January

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

ちゅう薬
如神丸



富山県小杉町
道振大薬房



写真は薬袋である。毎週第三日曜日を除く日曜日に開かれる富岡八幡宮の骨董市で見つけた。四、五十枚ほどあっただろうか。五枚百円と値札が出ている。絵柄の面白いものを選んでいたら、店の親父が声をかけてきた。

「五枚百五十円で売ってたときはほとんど売れなかったんだが、百円にしたらあつという間にそれだけしかなかった」そうか、一枚十円の違いで、それだけ売り上げが違うものなのかと思いが、「こんなもの買ってどうするんだらうね」と、自分のことは棚に上げて聞いてみる。「若い子が多いよ、ひとりは額にたくさん並べて飾るとか言ってたな」ふうむ、いわゆる昭和レトロ趣味か。

十枚選んだうちの一部分がこの写真である。横文字の表記が左から右のものが多くから、戦後のものだろう。ブルーのスタンピングでダルマのマークが押され、「トン

ブクネツタイ」には「富山県小杉町 道振大薬房」と赤で印刷されている。

この「トンプクネツタイ」は第一薬品工業株式会社小杉工場とも印刷されているから、道振大薬房とはその小売薬局だったのかもしれない。「せきどめ」は富山水橋町のヒルヤ薬品工業株式会社である。どうやらほとんどが富山県に関連する薬袋のようである。

富山といえど置き薬（配置販売）が有名である。これらの薬袋はおそらくその置き薬の一部なのだろう。店舗販売もされていたはずだから、どこかの薬局（道振大薬房か）が廃棄したものを骨董業者が手に入れ、昭和レトロ好みの若い衆に売っているのだろう。

「カゼトン」と「せきどめ」は未開封で、薬が入っている。内服薬であるから危険なものではないだろうが、とても開封する勇気はない。袋には効能を謳うコピーが添えられているが、薬の成分の表記は一切ない。



実母散

婦人血の道良薬



ZITUBOSAN

神奈川・鎌倉

高德院

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

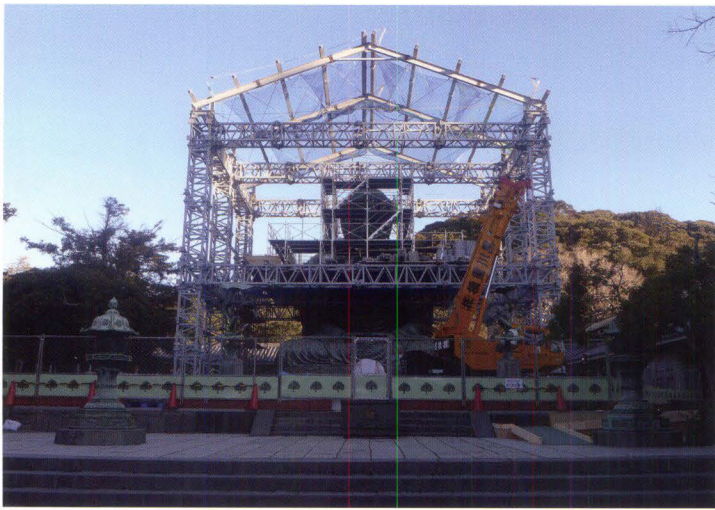
寺院紀行



高德院（通称鎌倉大仏）の本尊は露坐の阿弥陀如来座像。

鎌倉大仏 平成の大調査

平成28年
1月13日
～
3月10日

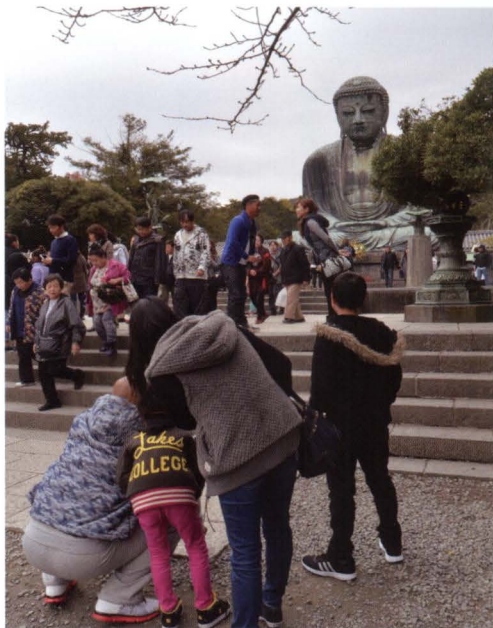


大仏像の昭和の大修理から55年、クリーニングと大調査を行った。滅多に見られない足場を掛けられた大仏像(上)。螺髪に新発見(右中)。膝の上には賽銭の十円玉(右下)。頬にわずかに残る金色(左下)。





長谷観音からの通りに大仏の入口がある。



平日でも外国人観光客で溢れかえる境内。

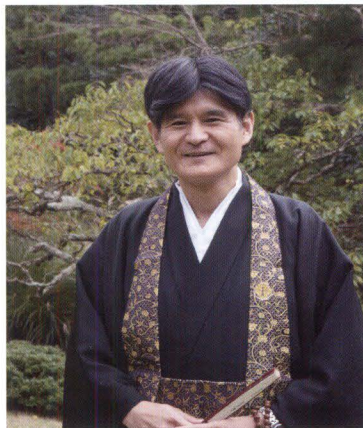


入り口を入るとすぐの仁王門。



タイ国王室によるお手植えの松。タイ国王室による3本もの植樹がある場所は、世界でここだけという。

境内から道一本隔てたところに歴代
住職、寺族などの墓が並ぶ。



客殿前の庭園に立つ佐藤孝雄住職。



内仏が祀られている庫裏二階に歴代
住職の位牌が並ぶ。



慶應義塾大学研究室での佐藤孝雄教授。
キリスト教の牧師でもある教授と研究室をシェアしている。

浄土

2017/1月号 目 次

カラーグラビア=寺院紀行 鎌倉 高德院	写真=真山剛	1
新連載 私の好きなご法語 第一回	伊藤唯真	6
法然上人と親鸞聖人(七)	林田康順	8
寺院紀行 鎌倉 高德院	真山剛	14
連載 響流十方	小村正孝	20
連載 江戸の川を歩く⑩	森 清鑑	24
連載小説 渡辺海旭⑦⑤	前田和男	30
連載 誌上句会	選者=無縫庵烏鷺坊	40
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	43
編集後記		44



表紙題字=中村康隆元浄土門主
表紙写真=鬼海弘雄
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

浄土の法門と遊蓮房とにあへるこそ、

人^{にんが}界の生をうけたる

思出にて待れ

法然上人はこの世に生を受けた思い出に、心の至宝を二つ挙げておられる。一つは万民平等の救済を課題として善導『観経疏』によつて開悟したときの「わが心に相應する法門」との出会いであり、それは歓喜の思い出となつた。すでに生涯の半ばすぎであつた。

いま一つはこのころ善導の宗教に傾倒し、「一向二念仏スルバカリ」で、念仏三昧に靈証を得て一族から仏のように敬われていた道心聖固の念仏ひじりが、比叡山の西の方、西山の広谷に居た。その僧名が遊蓮房円照^{ゆうれんぽうえんしょう}。善導の芳躅^{こうじやく}を慕つた高声称名の実践者で、「高声念仏ハカナラズ現徳ヲウル行」と確信していた。「経一卷書籍一卷毛身二持」たず、のちには「一向念仏バカリ」の人であつた。

法然上人は遊蓮房のことを知り、その許に、早くも身を寄せられた。両者とも善導の宗教に帰信されていた。互いに信仰を語り合い、ともに精神は昂揚した。出会いの期間は短

かかったがその質は高かった。法然上人にとってこの出会いは、利他の教化へと進む姿勢を固める機縁となった。もともと蒲柳の質であった遊蓮房はまもなく善峰寺とくみねでらの別所に移って、ここで上人を臨終の善知識として短い生涯を閉じられた。遺された庵室は上人に託され、これが東山大谷の地に移され、中の坊と称される念仏教化の拠点となった。

このようなわけで、善導による思考の枠組の大転換と、それに響応してくれた遊蓮房のことは、このあと上人の心中にながく光芒を放っていた——とわかるのである。

ところで、掲出のご法語を物語るとき、いつも想起するのは、故岸猊下主宰で七人のメンバーが互いに話題を提供しあった。諸先生の討議から多くの教示を得、幸せな時間をもつことができた。末輩の私に番が廻り発表したのが遊蓮房についてであった。当時、遊蓮房の専論はなかった。論文として公表したのは昭和四十五年と遅れたが、今も愛着がある。と同時に私を育ててくれた「法然上人伝研究会」への憶想が、私自身の「生を受けたる思出」となっている。

総本山知恩院猊下

伊藤唯眞

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載七〕

法然上人と
「浄土三部経」
③

林田 康順
(大正大学教授)

正行と雑行

前回、法然上人が、宗派の枠を超えて広まっていた密教の世界観にはよらず、あるいは、もつとも勢力が強く特別な位置に据えられていた『法華経』の世界観にはよらないことを高らかに宣言されたことを紹介しました。

法然上人は、『選択集』第一章を通じて、聖道門をさしおいて、「浄土三部経」に基づいた浄土門に帰入すべきことを説き、続く第二章において、浄土門に帰入した者は、善導大師の説示に従って「浄土三部経」を拝読する読誦正行を筆頭とする、次の五つの行（五種正行）を修めるべきことをお示しです。

① 読誦正行―「浄土三部経」を読誦すること。

② 観察正行―阿弥陀仏や極楽浄土を慕い、そのありさまを想い描くこと。

③ 礼拝正行―阿弥陀仏に対して礼拝を捧げること。

④ 称名正行―阿弥陀仏の名号を称えること。お念仏の実践。

⑤ 讃歎供養正行―阿弥陀仏の功德を讃え、物心両面から供養の誠を施すこと。

法然上人は、この五種正行に対して、それ以外の種々雑多な行を雑行とし、その中、五種正行に対して次のような五種雑行を挙げられます。

① 読誦雑行―「浄土三部経」以外の諸経典を読誦すること。

② 観察雑行―阿弥陀仏や極楽浄土以外のすべての対象を観察すること。

③ 礼拝雑行―阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩などに向けて礼拝を捧げること。

④ 称名雑行―阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩の名号などを称えること。

⑤ 讃歎供養雑行―阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩などの功德を讃え、供養の誠を施すこと。

阿弥陀仏に親しい行と疎い行

これら正行と雑行の根本的な相違について法然上人は、次のようにお示しです。

正行というは阿弥陀仏におきて親しき行なり、雑行というは阿弥陀仏におきて疎き行なり。

『三心義』昭法全四五六

（試訳）正行というのは阿弥陀仏との関係が親密な行であり、雑行というのは阿弥陀仏との関係が疎遠な行です。）

さらに法然上人は、正行と雑行の功德、あるいは、正行を修めた者と雑行を修めた者にもたらされる功德をめぐり、次のような五番相対を創唱されます。

① 親疎対―正行は阿弥陀仏と親密となり、雑行は阿弥陀仏と疎遠になってしまふ。

②近遠対—正行は阿弥陀仏が近くに寄り添い、雑行は阿弥陀仏と遠く離れてしまう。

③無間有間対—正行は阿弥陀仏に寄せる思いに絶え間がなく、雑行は阿弥陀仏に寄せる思いが途切れ勝ちになってしまう。

④不回向回向対—正行はことさら回向をしなくともそれ自体が浄土往生の勤めとなり、雑行はことさら回向をしなければ浄土往生の勤めとはならない。

⑤純雑対—正行は純粹に浄土往生を目指した行であり、雑行はさまざまな浄土や人間界・天上界に赴くための行となってしまう。

読誦正行と読誦雑行

なるほど「浄土三部経」は、阿弥陀仏を主人公として、極楽浄土の莊嚴を中心に描かれていますので、読誦すれば読誦するほど、阿弥陀仏は素晴らしく、尊いお方であり、極楽浄土はこの上ない、さとの世界であると受けとめることとなり、阿弥陀仏に帰依し、極楽浄土への往生を願う思いが知らぬ間に育まれていくのです。

その一方、読誦雑行の場合は異なります。例えば、『般若心経』を読誦すれば、〈空〉の体得へと心が向かうことになるでしょう。『薬師如来本願経』を読誦すれば、薬師如来の尊さを知り、薬師如来の瑠璃光浄土へと心が向かうことになるでしょう。ちなみに、東方に建立された瑠璃光浄土に心が向かうことは、西方に建立された阿弥陀仏の極楽浄土に背を向けてしまう結果を招きかねません。ともすると阿弥陀仏や極楽浄土とは疎遠になってしまうのです。

称名正行と称名雑行

阿弥陀仏の名号を称える称名正行と阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩の名号や「浄土三部経」以外の諸経典の経名を称える称名雑行の関係も同様です。すなわち、阿弥陀仏の名号を称えれば自ずと阿弥陀仏を慕い、浄土往生の思いが深まっていきます。その一方、真言宗では「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛」と唱えますので私達の心は自ずと弘法大師に向かいますし、日蓮宗では「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱えますので私達の心は自ずと『法華経』に向かうことになり、ともすると阿弥陀仏や極楽浄土とは疎遠になってしまふのです。

観察・礼拝・讃歎供養

観察正行と観察雑行にしても、礼拝正行と礼拝雑行にしても、讃歎供養正行と讃歎供養雑行にしても、その流れは同様です。阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の莊嚴を思い描き、阿弥陀仏に向けて礼拝を捧げ、その功德を讃え、阿弥陀仏に供養の誠を施せば、阿弥陀仏に帰依し、極楽浄土への往生を願う思いが自ずと育まれていきます。その一方、阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩の姿やさまざまな浄土の莊嚴を観察し、礼拝し、その功德を讃え、供養の誠を施せば、諸仏・諸菩薩への思いは深まる一方、ともすると阿弥陀仏や極楽浄土とは疎遠になってしまふのです。

吉水流詠唱と金剛流・梅花流詠唱

ちなみに、浄土宗の詠唱である吉水流は讃歎供養正行に配当されています。吉水流において唱えられる御詠歌の多くは法然上人が詠まれ、御和讃は浄土宗の信仰や各種行事に直接関係するお歌です。ですから、詠唱に励めば励むほど、阿弥陀仏に帰依し、極楽浄土への往生を願う思いが知らぬ間に育まれていくのです。その一方、高野山真言宗の詠唱である金剛流では弘法大師や真言宗の教えが唱えられ、曹洞宗の詠唱である梅花流では道元禪師や曹洞宗の教えが唱えられますから、詠唱に励めば励むほど、弘法大師や道元禪師に帰依し、真言密教や禅への思いが自ずと深まっていくのです。

正定業と助業

さらに法然上人は、善導大師の説示に従って、阿弥陀仏の本願、特に第十八念仏往生願に基準を置いて五種正行をさらに判別し、五種正行の中、第四の称名正行、すなわち称名念仏を阿弥陀仏が万行の中から浄土往生の行として、ただ一つ選び定められた正定業であるとし、その他の前三後一の四種の正行は、それらを修めることによって、自ずと阿弥陀仏に帰依し、極楽浄土を願う心が育まれ、私達の心を正定業である念仏一行に向けさせる助業であるとお示しになりました。

読誦正行から本願念仏へ

法然上人は、読誦正行を修める者が念仏一行に向かう経緯について次のようにお示しです。源空も念仏のほかに、毎日に阿弥陀経を三巻読み候いき。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。しかるを、この経に詮ずるところ、ただ念仏申せとこそ説かれて候えば、

いまは一卷も読み候わず。一向念仏を申し候なり。（『隆寛律師伝説の詞』昭法全四六四）

（試訳 私、源空もお念仏を称える他に、毎日、『阿弥陀経』を三度読誦してありました。すなわち一回は唐音で、一回は呉音で、一回は訓読です。しかし、この『阿弥陀経』の肝要は「ひたすら念仏を称えよ」と説く点にありますので、今はもう『阿弥陀経』を一度も読誦しておりません。ただひたすらお念仏を称えているばかりです。）

このように法然上人は、『阿弥陀経』の説示内容が、それを読誦した者をして、自ずと念仏一行に向かわせる心を抱かせる作用を有していることを明らかにされます。もちろん、『無量寿経』や『観無量寿経』の内容も念仏一行を勧めている以上、こうした『阿弥陀経』の作用は、『無量寿経』や『観無量寿経』を読誦した者にも及ぶことになります。

ちなみに法然上人は、観察正行を修める者も、念仏一行に向かう作用が及ぶことを次のようにお示しです。

ある人問うて曰わく、色相観は観経の説なり。たとい称名の行人なりといとも、これを観ずべく候か、いかん。上人答えての給わく、源空も始めはさるいたずら事をしたりき。今はしからず、但信の称名なりと。（『乗願上人伝説の詞』昭法全四六六）

（試訳 ある人が「阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の莊嚴を想い描く観察の行は『観無量寿経』の説くところですよ。たとえ称名念仏の行者であっても、そうした観察の行を修めるべきでしょうか」と質問しました。それに対して法然上人は、「私、源空もはじめはこうしたどうにもならないことを試みはしましたが、今はいたしません。ただひたすら阿弥陀仏の本願を信じてお念仏を称えるばかりです」とお答えになりました。）

このように法然上人は、『浄土三部経』の拝読を含む五種正行を修めれば、自ずと私達の心は称名念仏一行に向かうことを明らかにされたのです。

（続く）

寺院紀行

神奈川・鎌倉

高德院

文・撮影／真山剛



客殿二階の内仏。日々の勤行は屋外の本尊から始め、最後はこの内仏で終わる。

「インバウンド」、昨年、この聞き慣れない言葉をしばしば耳にした。何度か聞くうちに海外から日本を訪れる観光客の意味だと知ったが、この外国人観光客、予想を上回る勢いで増えているという。国別では一昨年から爆買いの中国がトップになり、銀座や秋葉原に殺到しているのを目のあたりにしたが、国によつては人気スポットも変わってくる。

「タイやミャンマー、スリランカからの観光客が日本で一番訪れたい場所がここなのです」
 こう教えてくれたのは鎌倉の名刹、大異山清浄泉寺高德院、通称「鎌倉大仏」の第十五世、佐藤孝雄住職だ。佐藤住職は、お坊さん以外に慶應義塾大学文学部教授という肩書を持ち、考古学の中でも特に動物考古学という分野で大いに活躍されているのだが、その話は後ほど。

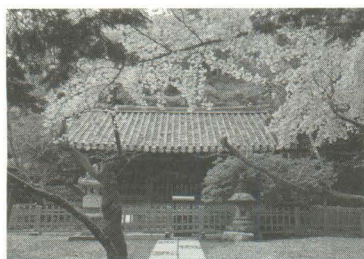
「当院を訪れる小乗仏教国の方々には、厳冬期でも開門前に並ばれ、開門と同時にご尊像

(大仏さま)を参拝される方がおられます。そうした方々が一樣に冷たい地面に身体を投げ出して礼拝される姿には、信仰の力を感じます。

わずか30軒足らずのお檀家しか持たない当院ですが、信徒は国内外に数多抱えていると自負しております」

彼ら小乗仏教国からの参拝者は、異口同音に「奈良の大仏さまよりも鎌倉の大仏さま」という。その理由は、鎌倉の大仏さまが露坐、つまり建物に入っていないからだそうだ。かつてタイで見た金ぴかの大きな仏像が屋外に祀られていたことに不思議な感じを受けたことを思い出した。彼らにとつては、屋内に祀られている大仏さまは何やらいじめられている、と映るそうで、青空の下に鎮座する像が自然な姿なのだそうだ。

さて、インバウンドに戻るが、古都鎌倉も観光客はうなぎ登りというが、こと鎌倉の大



鎌倉観音霊場23番札所ともなっている観月堂。東京目黒から移転されたお堂だ。

仏に関しては、江戸の昔にも外国人が訪問していた記録が残っている。

佐藤住職の叔父にあたり、国連大使だった佐藤行雄さんと芝学園時代からの親友で高徳院に頻繁に出入りしていた清水真澄先生(現・三井記念美術館館長)の著書『鎌倉大仏——東国文化の謎(昭和五十四年有隣堂)から、外国人が持つ大仏の印象を引用させていただく。

鎌倉大仏訪問の記録を最初に残したのは、慶長十八(一六一三)年、成立したての江戸幕府にイギリス国王の国書を携えて来朝したジョン・セーリス司令官になる。

「往來の人々はこの像をとて崇拝する。われわれの一行の中でその胴体の中に入ったものがあつた。旅行者達がその表面に文字や記号などを沢山書きつけているのが目についた」と記されている。

その三年後、平戸の商館長リチャード・コックスはこう書いている。

「しかし何よりも私が一番感嘆したのは、ダイブツと呼ばれる巨大な真鍮の偶像であつた。山と山にはさまれた谷間に立っている。堂は朽ち果てて遺っていない。四百八十年前にたてられたものである。この偶像は(裁縫師のように)足を組んで座っているが、私の見たところでは高さ二十ヤード余、膝と膝の間隔は十二ヤードを超えている。その頭部の広さは、三十人以上の人が中に立つことができる程と思われる。内部に入ってみたが、まるで大きな家のように広がった。私の考えるところでは、それは世界の七不思議の一とされているローズの像より大きいものであろう。そのローズの像はその破片を積むのに九百頭の駱駝を要したと伝えている。しかしこの像の銅を運び去るには優に三千頭の馬を要すると思われる。要するに驚くべきものである」

(『ガウンを着けた鎌倉の大仏』岡田章雄著)

この後は鎖国となり、外国人による大仏の

大仏の回廊の右奥にある客殿は、観光客で溢れる境内とうって変わって静かなたたずまい。



記録は一気に幕末の頃のものとなるが、その記録にも、その大きさに驚くとともに、背中の二つの窓からの光で読み取れる大仏の中に書かれた多くの落書きについて記してあったり、製造方法まで書いているものもある。

いまでこそ、一日何千人と観光客が訪れる高徳院だが、戦後間もない頃までは貧乏寺で、歴代住職は大仏像を背景に外国人観光客の記念写真を撮り、その写真・撮影料を生活の糧に充てていたという。そうした中で、現住職の祖父にあたる、高徳院第十三世、佐藤密雄住職が拝観料の徴収に踏み切った。鎌倉に有料拝観寺院が無いなかで、当時密雄住職は大変な批判を浴びたという。三十件足らずの檀家しか持ち合わせない寺院の経済事情の厳しさは世間には伝わらなかったのだ。

もともと、現在の拝観料も大人一人200円と京都の寺院などに比べると格段に安価に抑えている。これは、この時の批判を踏まえ、

寺を維持するのに必要なだけ納めていただくという哲学が生きているからだと聞く。密雄住職は常々、「拝観料は駄の入場料程度を目安に定めればよい」と語っていたという。

さて、ここで大仏の由来を少々紐解こう。奈良東大寺の大仏殿再興供養に参列した源頼朝が東国にも大仏を、という意思がその発端と前出の『鎌倉大仏』に記され、東大寺に行した侍女の稲田野局が発願し、勧進僧は浄光上人。一二四四年に木造として完成するが、三年後に台風で倒壊。一二五二年から铸造を始めた青銅像となり完成、木造時代同様大仏殿の中に鎮座していたが、二度の大風で建物倒壊した。その都度再興したもの、明応七（一二四七）年の海潮に流失、三度大仏殿を失った後は露坐の大仏となり、時が下り正徳二（一七一二）年、芝増上寺の祐天上人が大仏の鑄掛修理や周縁の田地を購入して高徳院を建立した。その後一度重なる修理を経て



大仏建立を発願した稲田野局の供養塔が大仏のすぐ後ろにたつ。祐天名号が彫られている。

今日に至っている。

これが、一言大仏史。国宝のこの大仏の歴史を調べられた先生方は少なくないが、その建立の経緯をはじめ、今だに多くの謎に包まれている。

さて、こうした大仏像のクリーニングと新たな事実を発見できないかと、昭和三十六（一九六一）年の昭和の大修理から五十年目にあたる平成二十三（二〇一一）年、大規模な調査が計画された。

医学や科学の急速な発達で、人体の健康診断が急激な進歩を遂げているように、今回の調査では最新の科学技術や分析方法、非破壊検査、常時微振動調査、さらに錆や付着物の蛍光X線分析といった従来にはない検査方法など、「未解決の課題解明のためにできることは何でもやる」というスタンスで調査に臨む予定だった。ところが、東日本大震災により、調査は延期。そして、五年が過ぎた昨年一月

十三日から三月十日にかけて、「平成の大調査」が実施された。素屋根を掛け、足場を渡し、大仏像の細部にいたるまで観察する作業が行われた。佐藤住職は言う。

「実際に間近で見て分かることの方が沢山ありました。螺髪（ほふ）のつなぎ部分、賽銭として膝の上に投げられた十円玉の銅がご尊像の銅と一体化してしまっている様子、前回の修理で使ったパテや強化プラスチックの劣化など。事前にドローン（飛行機）を飛ばして画像では見ましたが、実際に間近で観察することで初めて気付かされることも多々ありました」

いまでこそ剥げ落ちていたが金色は一体、金箔だったのか、メッキだったのか。各部分の銅の厚さや、付着物の分析……、本誌の発行時期を過ぎないと分からない結果がまだまだあるという。科学や史学、考古学の進歩で歴史が書き換えられることも少なくない昨今である。この平成の大調査で解明される謎が

大仏の胎内に入ることができる。国宝で唯一自由に触れるのがこの鎌倉の大仏像。



あるかもしれない。

また、今回の調査で忘れてならないのが、慶應大学文学部教授としての各種研究に携わってきた佐藤住職のキャリアと人脈がこの調査に大いに活かされたことである。

「実は考古学というのは人文社会と自然科学をつなぐ糊のような性格を持つ学問なのです。歴史というと文学部の専権事項のように思われますが、歴史を扱う学問は所謂「自然科学」に分類される学群の中にも存在します。

地形や動植物層、構造物。凡そ私たちの目にするものに歴史を担っていないものは何一つありません。それだけに歴史を扱う学問分野は「人文社会科学」・「自然科学」双方の学群に存在します。その中、分けても考古学は他分野との協業が日常的に求められる分野だけに、所謂「人文社会科学」と「自然科学」双方の研究を繋ぎ、多角的な視点で物事を捉えることに長けた学問だと思います」

こう語る佐藤先生は、百五十人にのぼる慶

大文学部教員の中、ひととき高額の科研費（文学部科学省などが個人の研究に出す補助金）を獲得されているという。国から科研費を給付される教授の多寡は大学にとっても重要で、大学の評価や人気にも直結する。ちなみに佐藤教授がどんな研究課題で科研費を受けているかはインターネットで容易に検索できる。

「自身が領域横断的に研究を重ねる中、築かれるところとなった人脈。振り返って見れば、その人脈が今回の調査にも活かされることになりました。仏教学に直結しない自身の研究が、大仏像の調査・研究にも資することになるうとは、人生とは不思議なものです」

大仏像の来歴と現代社会における意味を多角的に解明しようとされている佐藤住職。話を聞くうちに、高德院住職と考古学の教授という二足の草鞋を履くことになったのも仏天の配剤のように思えてきた。（ルポライター）



本誌『浄土』の和歌の選者でもあった与謝野晶子の歌碑が観月堂の右手奥に建っている。

響流十方こいうるじゅうほう

いければ念仏の功つもり　しなば浄土へまいりなん
とてもかくても　此の身には
思いわづろう事ぞなきと思ひぬれば
死生ししょうともにわづらいなし

(法然上人)

生きている間はお念仏を称ほめえてその功德くどくが積もり、
命尽きたならばお浄土にまいらせていただきます。

「いずれにしてもこの身にはあれこれ思い悩むことなどないのだ」
と思つたならば、

死するも生きるも、なんの心配もなくなるのです。

否定のあとの大肯定

新しい年を迎えることができた。年があらたまるということは、歳も一つ、また重ねることになるわけだが、「まだ〇歳」と余裕でかまえるのか、「もう〇歳」と危機感をもつてとらえるか、人により違いがあろう。もつとも、ある面では「まだ」、またある面では「もう」と、ときと状況によって意識的に、または無意識に使い分けているのが実際のところだろうし、それでいいようにも思う。もしかするとその変幻自在さが、人に与えられた処世能力の一つとも言えるのかもしれない。

ということ、年頭、あらためて自分の肚はらに据えようと、一つの言葉を掲げてみようと思いたった。好きな仏教語である。

「真空妙有しんくうみょうう」。般若經典によれば、究極の真理というものは本来、人間が作り出した言語での表現を超えたものであって、言語をもつてはついに正確に示したり伝えたりすることはできないという。膨大な巻に及ぶ般若經典を開いてみると「不可説、不可得」などの語が繰り返し出てくる。説くことも、まして体得することもできない、というのだろう。

しかしそれでは話が終わってしまうから、あえて言語を頼りに説明を試みるなら――。一切の事象は、ある「因」にさまざまな「条件」が加わって成り立つ

ているとする縁起の法則にある以上、転変することを性とし実体なるものではなく、したがって執着すべきでない（真空）とする。が、それは否定されたままなのではなく、最終的に仏の立場からは大いなる肯定に引き戻され絶対的な存在と意味づけられる（妙有）、ということのようだ。「ようだ」というのは無責任だが、筆者はまったく、その域に達していないことによる。

学生時代、若くして他界した木村泰賢博士の『全集』（第六卷、一九六七、大法輪閣）を読んだ。そこに見つけた、大乘仏教の真髄は真空妙有にあるとする立場からの「この際における空は決して虚無の空ではなくして、否定に否定を重ねて最後に到達した妙有の空であらねばならぬ……空の修養は、決して何らの力なき消極的のものではなく、むしろ何物も及ばない積極力として、具体的差別に実現されるということを目標としたもので……」の説示に、つかえていたものがスウツと胸を落ちていくような、肩に入っていた力がふっと抜けていくような、そんな不思議な心地よさを覚えたのを、いまでも鮮明に記憶している。

新年早々深い森に迷い込んだような話になってしまった……。

ではその「真空妙有」、具体的には？と訊かれたら、どう答えることができる

るだろうか……。

新聞の人生相談のコーナーに、三十代の主婦が「夫が異常に無口で困っている。いただきます、おはようといった挨拶すらもとにせず、小学生の息子から『ちゃんとと言いなさい』と咎められる始末。どうすればいいか」との投稿があった。回答者いわく、「子どもがすっかり挨拶できていないなら大いに結構なこと。旦那は反面教師の役を担っていると思えば問題ないのでは」。主婦が納得したかどうかはわからないが、こうした柔軟な観方というものの、これを「真空妙有」と無縁ではなさそう、などと言ったらお釈迦さまから叱られるだろうか。たとえば、であるが。

穢土えどを厭いとい、浄土じやうどを欣ねがう。これは「真空」と重ならないだろうか。冒頭に紹介した法然上人のお言葉、「生きらば念仏の功つもり しなば浄土へ参りなん」がそうだろう。そして結び、「死生ともにわずらいなし」は「妙有」と重ならないだろうか。少なくとも小生にはそう映るのである。

阿弥陀如来の、目には見えない慈悲の導きにより、やがて「大乘仏教の真髄」は小生にも体得されるときが訪れるであろうか。「柔軟さ」の日々を心がけつつ、そのときを待つこととしよう。

(小村 正孝)

江戸の川を歩く

第十回

森清鑑

江戸ウォーカー

古川水系（赤羽川、新堀川、金杉川、渋谷川など）

家康が江戸に入府した一五九〇年頃、古川水系の河口、すなわち江戸湾に注ぐ、金杉橋、将監橋辺りは、大きな入り江であった（古川入り江）。そして、長い時間をかけて、洪水、鉄砲水などで海に押し流された土砂が赤羽の州を生んでいた。幕府は、これを土台に、海に向かって埋立を進め、やがて、芝金杉、浜松町などの町が形成される。町中を南北に東海道が通り、江

戸湾沿いには、防備を兼ねて武家屋敷を配置。古川入り江は、全く姿を変えることになった。

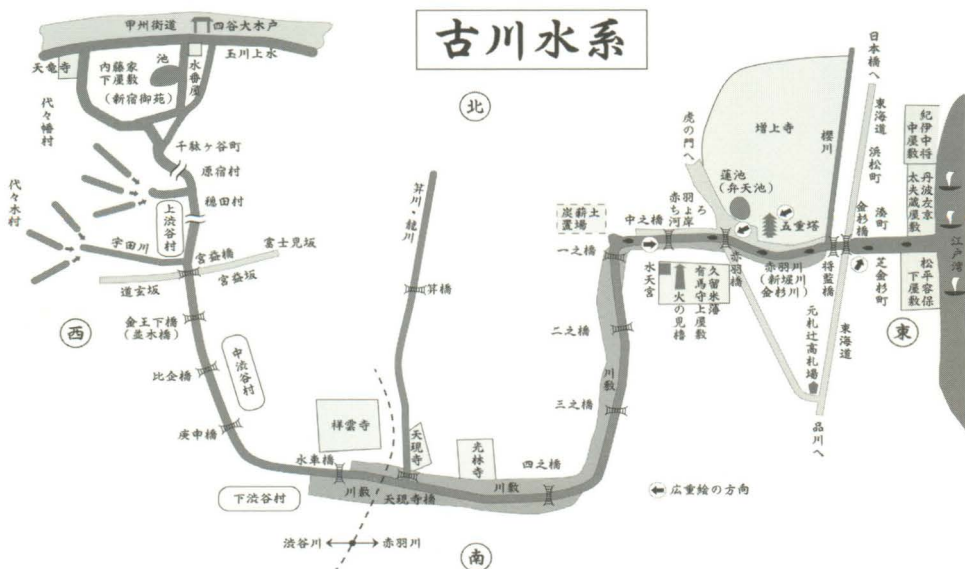
水源を内藤屋敷（新宿御苑）辺りとする古川は、各所の湧水池から流れ込む小川を合わせて、江戸湾に流れ込んでいたが、全体に細い流れであった。しかし、一六七五年には、芝金杉の海岸から麻布十番辺りまで川幅と水深を広げ、通船が可能となる。そこで処の人々は、河口部の赤羽川（金杉川）のことを新堀川とも呼ぶようになった。

さあ、そこで舟に乗って江戸湾から上流に向かって

出発。江戸湾に面する、陸奥二本松藩、丹波左京太夫の蔵屋敷と会津藩・松平容保の下屋敷の間を縫って古川（赤羽川）に入る。左右の岸は、湊町や芝金杉町の町並み。そして東海道に架かる金杉橋を潜る。この辺り、江戸時代の典型的な港町の風情。帆船が一杯停泊している。芝金杉同朋町を経て、将監橋（江戸湾を守る向井将監にちなむ）に到着。

さて、ここから赤羽川の様子はがらりと変わる。広重は次の赤羽橋に向かって川の様子を描いているが、深い緑の堤に覆われた、正に渓谷の観。何艘もの舟が行き交う。将監橋を潜ると右手から櫻川（愛宕神社の前を通り増上寺を囲む）が流れ込んでいる。ここから赤羽橋までの北側は、全て徳川家の菩提寺、増上寺である（約二十万坪）。各所に船荷の揚場があり、ほどなく赤羽橋に到着。

赤羽橋は、交通の要衝に架かる橋で、江戸では、その名を聞けば、場所が想像できる知名度。東海道の札の辻から分岐してきた道が、この橋を渡り、虎ノ門方面に向かう。橋の北側に広小路があり、大勢の人が歩いている。そこで幕府からの御触れを告げる、高札が

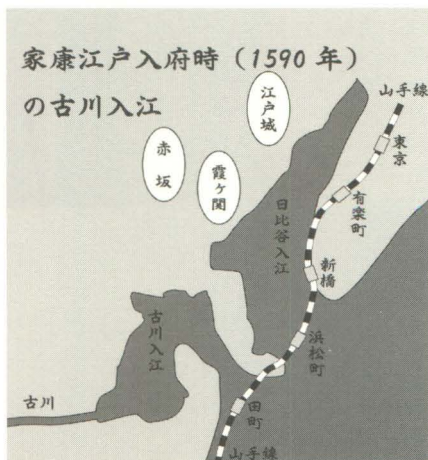


立っている。そこは、増上寺の裏門で、入ると、時の観光スポットでもある、大きな蓮池（弁天池）が見える。この広小路の左側には、川に沿って「赤羽ちよろ河岸」が続く。おおいなる賑わいを見せている。川の南側、つまり左岸には、久留米藩、有馬中務大輔の上屋敷が控え、それは次の中之橋まで続いている。有馬屋敷内の北角には、水天宮の幟が六本立ち、通行人の目に止まる。子が授かるように、安産、水難除け、水商売などのご利益を願って、江戸っ子が足繁く通った処である（明治期、有馬屋敷の移転で、日本橋蛸殻町に移動）。この水天宮から盛り上がる丘林から、一際高く、大きい「火の見櫓」が立っている。これは、江戸で一番高い火の見櫓として有名で、江戸っ子のはやり言葉「高いもんだ有馬の火の見」を生んだ。それもそのはず、有馬藩は増上寺の「火の御番」役を仰せつかっており、その功によって、幕府から賞賛されていたのである。

赤羽橋からすぐに中之橋に着く。橋の袂に揚場が設けられており、船荷が積み卸しされている。ここは、幕末にハリスの秘書兼通訳、ヒュースケンが暗殺され

た場所でもある（ヒュースケン事件）。二代目広重は、ここから赤羽橋に振り返って川の景色を描く。左に増上寺の五重塔、右に有馬屋敷が描かれている。

中之橋を通過すると、兩岸は、芝南新門前町の家並みとなり、右手にかなり広い炭薪土置き場がある。通称、薪河岸。元禄の頃、材木屋、薪屋、土屋がこの地を拝借、薪を積み置きたところから薪河岸。材木も積み上げられている。その先端部に増上寺將軍御霊屋御掃除屋敷代地がある。増上寺將軍御霊屋の掃除人が使った地である。ここでは、赤羽川は広い溜まりとな



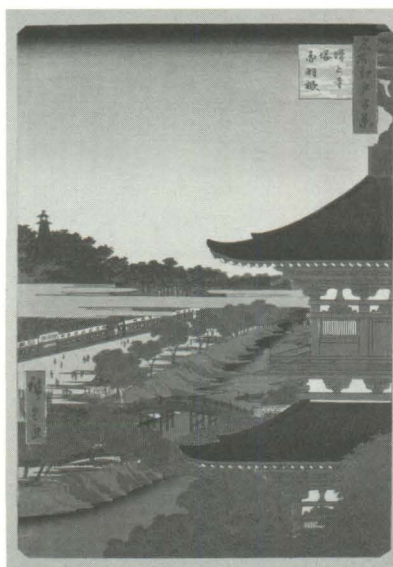
◆家康入府時（一五九〇年）の古川入り江

り、急転、南に下る。そこに一之橋が架っている（ここで幕末、清河八郎が暗殺された）。川の右側には、広い緑の川敷、土手が広がってくる。すると、ほどなく、二之橋（現在、一之橋、二之橋は地名として残る）。ここから、大名、御家人屋敷を突っ切って、なおも南に下ると、三之橋に出る。川の左右には武家屋敷や寺に混じって町民の家宅が並ぶ。ほどなく、赤羽川の流れは、また急に東西に変わる。舟を右に回して直進する。川の周囲はひときわ広い緑の川敷が広がる。所々に船荷置き場が設けられている。そして四之橋に到着。ここまで小舟が頻繁に往来していたわけである。

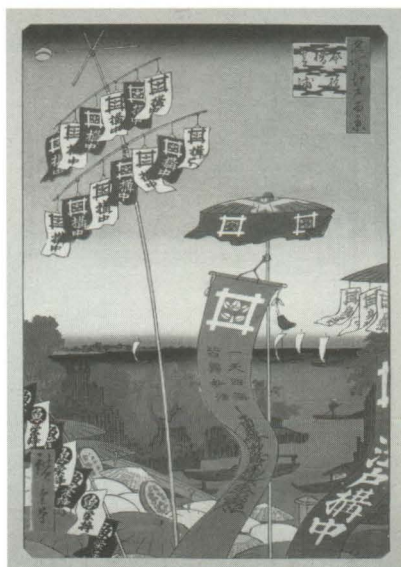
やがて、広い河川敷の右手に、光林寺が見える。ここは、江戸期、桜の名所として有名。左岸は白金村の農村。農家と畑が目立ってくる。流れは、ほんの少し北に転じる。右側に毘沙門天現寺。この寺に沿って北から赤羽川に流れ込む川が筈川である。

筈川

筈川は、江戸時代、龍川、親川とも云い、青山墓地の丘の両端からの流れと、その東南にある、長谷寺の



◆広重：赤羽川「増上寺五重塔、赤羽橋」絵の左：久留米藩有馬屋敷



◆広重：金杉橋から江戸湾を望む

水溜を水源とする流れが、霞町の南の笄橋で合流し、広尾橋を抜け、天現寺橋（天現寺の赤羽川沿い）から古川（赤羽川）に流れ込んでいた。

渋谷川

川の南がわは、広大な下渋谷村の田畑に代わり、川呼び名は、赤羽川（金杉川、新堀川）から渋谷川に変わる。

渋谷川は、そのまま西に流れ、辺りは、広い緑の川敷を流れる牧歌的な光景。渋谷川は、各所で蜚が有名であったが、恐らくここでも蜚が飛び交っていたことだろう。ほどなく、水車橋があり、その北には、広尾を代表する、黒田長政の菩提寺、祥雲寺がある。祥雲寺は、臨済宗大徳寺派の寺院で、黒田家の他、久留米藩主有馬家など九大名の江戸菩提寺。徳川將軍家の来訪も多く、著名な医師、文化人の墓も多い。四之橋からこの辺りまで、川を挟んで北側は、武士階級、南は農地とはっきり棲み分けがなされている。

流れは、下渋谷村の田園を突っ切り、庚申橋のところから北上する。この辺りから、川の北も南も農村地

帯となる。次の比丘橋を通ると、中渋谷村の田園風景が広がる。流れはどんなに北上し、金王下橋（並木橋）に出る。右手の坂上がったところに金王八幡宮。やがて宮益橋が見えてくる（宮益坂交差点）。右手に高札が立ってお

り、宮益坂。急にせり上がると富士見坂。左を見ると道玄坂の急坂が見える。江戸末期では、すでに茅葺き屋根の家々が並ぶ、道玄坂町が形成されている。しかし、その周囲は、中渋谷村の田畑。宮益橋を渡ると、代々木村に端を発する宇田川が流れ込んでいる。源流の



◆広重：赤羽川「赤羽橋」。有馬の火の見櫓と水天宮の幟。絵の右に中之橋と炭薪土置き場。材木林立。

代々木村では、幾もの川筋（河骨川）となって、田畑を潤している。一九二二年、代々幡村に住んでいた（参宮橋、代々木八幡駅の間）、高野辰之は、その流れを見て、故郷長野の故郷を思い起こし、「春の小川」を作詞。そのくらいのだかな田園風景だったのである。

宮益橋を過ぎると、地名は、上渋谷村に入る。流れはほとんど北上し、穂田村を過ぎると、原宿村。幾つもの小さな流れがこの間に合流している。本流は、竜岩寺の一本松（神宮前）から、さらに北上し、千駄ヶ谷町で、広大な高遠藩内藤家の下屋敷（新宿御苑）の南に出る。ここで屋敷を囲む二つの流れがさらに合流している。双方とも、この屋敷の北側を甲州街道沿いに流れる、玉川上水の吐水である。東側の流れは、この下屋敷の北東角にある、四谷大木戸側の水番屋（上水の水管理する処）から吐水として、屋敷内に入り、大きな池（現、新宿御苑玉藻池）からの水と相まって屋敷の南がわを出て、合流。左側の流れは、江戸時代、時の鐘を告げる天竜寺から屋敷の西側を沿って流れ、千駄ヶ谷町で合流しているわけである。

このように古川水系は、江戸の田畑を潤し、下流の

赤羽川となつては、水運の役目を果たし、風光明媚な江戸の田園風景を壊出していた。しかし、今や、古川となつて上を高速道路が走り、渋谷駅近くまであるものの、当時の面影は全くない。数多の合流していた分流入に至っては、道路となり、痕跡すらないが、いくつかの部分は、地下下水道となつて、活かしている。



◆広重：赤羽川：中之橋から赤羽橋を望む。左上、増上寺の五重塔、右、有馬屋敷

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十五回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

在異郷十有余年、愈々帰国③



珍田捨己は、明治の御一新を十年後に控え、その胎動が密かにはじまっていた安政三年

(一九五七)、代々学者の家系である津輕藩士の長男として生まれている。ということは、渡辺海旭よりも十六歳上にあたる。明治元年、藩校の「稽古館」に入学。漢籍の素養を身につけるが、翌年、藩の特命をうけて、開国の気運のなか同校に新設された英語科(後に「私塾東奥義塾」に改組)で学ぶ。明治天皇の東北巡幸のおり、選ばれて英語で御前講演を披露するほどの俊秀の誉が高かった。同校の英語教師で牧師でもあったイングの強い推挙もあり、イングの母校であるアメリカ合衆国はインディアナ州のアズベリー大学(後のデポー大学)で四年間学びメソジスト派の牧師の資格も得て帰国。母校の東奥義塾で英語の教師兼牧師となるも、青雲の志を抱いて上京、紆余曲折をへて外務省に入省。しばらくは電信兼通訳の「下働き」で、妻子も養えない安月給のため、英語教師のアルバイトで糊口を

しのぐが、そこで浄土宗学東京支校在学中の海旭と出会うことになる。

やがて、上司の小村寿太郎の引きもあつて、明治二十三年米國サンフランシスコ領事に登用され華麗なる外交官としての第一歩を踏み出す。以後、韓国仁川駐在領事(明治二十七年)、清國上海駐在領事(同二十八年)、ブラジル駐劄弁理公使(同三十年)、オランダ駐劄公使(同三十二年)、ロシア駐劄公使(同三十三年)を歴任。海旭がドイツに留學して三年目にあたる明治三十六年、珍田は桂太郎内閣の外務次官に就任し、小村寿太郎外相を輔佐して、難航をきわめる日露戦争後の講和条約締結交渉を下支え、その功労を認められて明治四十年、男爵に任じられ、翌四十一年に、ドイツへ大使閣下として赴任、いまこうして海旭と相まみえているのであった。

さらに先回りをして、海旭と出会った後の珍田の経歴についても記しておこう。

幕末に列強と結ばれた不平等条約のうち

「治外法権」は、珍田の先輩の小村寿太郎らの努力によってすでに撤廃されていたが、関税自主権の回復はまだまだ成し遂げられていなかった。それをまずはドイツ相手に実現することが駐独大使としての珍田のミッションであった。

珍田は東北人ならではの粘り強さで交渉を重ねて対等条約の締結に結びつけ、ここに幕末以来の日本の悲願は達成され、その功績により、珍田は子爵に陞爵。海旭が十一年に及ぶ留学生活から帰国した翌年の明治四十四年には、ドイツ大使の任を解かれて、駐米全権公使に栄転。その任期中には、今も日米親善のシンボルの出来事として語り継がれているワシントンにはポトマック河畔に桜の植樹が、珍田夫人とタフト大統領夫人の手で行なわれている。大正九年には、第一次世界大戦後のパリ講和条約会議に全権の一人として参加。ドイツの山東利権の処理などをめぐる列強との意見対立を、これまた持前の粘り強い交渉力で乗

り切った結果、「霞ヶ関一のキレ者」の異名を奉られ、その功で東北出身者としては異例ともいえる伯爵の位にまでのぼりつめる。

この年、外務省を退官し枢密顧問官となつてからも、時代は珍田を放っておかなかった。大正十年皇太子裕仁親王の欧州訪問に供奉長として同伴、その重責を果たした後は皇太子の指導教育係となり、五年後の大正十五年十二月二十五日、裕仁親王の天皇即位をうけて侍従長に就任するが、二年後の昭和四年、在任中に脳出血で急逝。享年七十三であった。さらにその四年後の昭和八年には、海旭も流感で他界している。

*

以上、珍田捨己の生涯を素描したが、まさに明治大正の激動の日本外交を担った立役者の一人であり、小村寿太郎や牧野顕伸のように歴史の教科書に名こそ留めていないが、彼らと並び称されても不足はない「大外交官」といつていだろう。

そんな大立者に向かつて発展途上中の外交官と、いまだドイツの大学町でくすぶっている一寒僧がいまこうして出会おうとしている。いったい、ここから何が始まるのだろうか？ それでは、その後の渡辺海旭の人生を決することになる、興味深いやりとりを、妄想をたくましくしながら、再現してみよう。

日独開戦近し!?

珍田の私邸に招かれた海旭は、とつくにたそがれ時をすぎていたこともあり、いきなり食堂へと案内された。食堂といっても、シャンデリアが二つも天井からつるされ、中央には優に二十人が料理を囲めるほどの長大なオークのテーブルがでんと据えられている大広間である。すでに卓上には、食事と酒が用意されていた。思わず海旭は目をみはって、ごくりと唾をのんだ。そこにはもう十年近くも食したことがない懐かしい故国の家庭料理が並べられ、できたてらしくかすかに湯気を

立てている。豆腐料理、何かの粕汁、鮭と思われる切り身を味噌につけて焼いたもの、青菜のおひたし……。いったい、どうすればこんな食材を数千キロも離れた異郷の地で手に入れることができるのか？ やはり大使とは大した特権をもっているものらしい、だが、それにしてもこれほどまでして自分のような寒僧を接待するのはなにゆえか……と思案しているところへ、邸宅の主が和服に着替えて現われた。

珍田は席につくなり言った。

「渡辺君、国に帰りたくなつたのじゃないかな。粗餐だが、すべて家内の手づくりだから、大いにやってくれたまえ」と漆塗りの椀に入つた豆腐の葛掛けを指さした。「私と同郷の家内が、わざわざ津軽から大豆と葛をとりよせ、試行錯誤をくりかえして豆腐に仕上げたものだ。のろけを言うようだが実にうまい。ベルリンの高級料理屋のどんな料理より絶品だ」

「あ、ありがたく頂戴します」

と答えた海旭だが、これは自分に帰心を促すための仕掛けなのだろうかといふかった。だが、自分にそんな値打ちがあるのだろうか？ この歓待の意味はなんだろうか？ とまたぞろ疑念が胸中に湧いてくる。

珍田は爛をつけた銚子を手にとつて海旭へ勧めた。「ドイツのビールもいいが、われら日本人にはやはり酒だ」というと、「それにしても、君はなぜ国へ帰らんのかね」と訊ねた。

やはり来たか。海旭は酒を珍田へ注ぎ返すと、留学の再々延長を申し入れて宗門から給付金を打ち切られたこと、畏友の東大教授の姉崎正治の仲介で、富豪カーンに援助を求めたが断られたことを簡単に説明したうえで、答えた。「ロイマン先生との共同研究も先が見えてきましたので、このあたりでぼちぼち帰国の算段をつけようかと……」

「そんな悠長なことはいっておられんぞ」珍田はそれまでの柔和な表情を変えた。「この国の皇帝は尋常ならざる男だ。仕事柄、皇帝

にも拝謁、その部下たちとも日常的に会つておるが、厄介この上ないと感じるのは、やつらの排日主義だ。幕末以来の不平等条約の改定も大難事だが、なんとか目途がつきそうだが、やつらの排日主義には解決の目途はたたん」

皇帝とは、今ドイツを治めているヴィルヘルム二世のことで、珍田が「厄介きわまりない」と断じたのは、皇帝が数年前から唱える「黄禍論」である。

「そうだ、ぜひとも君に見せておきたいものがある。ちよつと失敬するよ」珍田は席を立つと数分で新聞をもつて戻り、海旭に手渡した。「これがその証拠だ。昨年、『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された皇帝のインタビューだ。読んでみたまえ」

次のような概要だった。

「ロシアは白色人種の利害代表者として日本と戦つた。ところがロシアは戦さ下手で、ドイツなら日本を打ち負かしていたはずだ。ロ

シアが黄色人種に弱点をさらした以上、黄禍の拡大に歯止めをかけるのはドイツの役割だ。わがドイツはアメリカと協力して中国を応援する約束を交わしたが、これは日本の進出を抑え、極東における勢力均衡を保つためである」

記事を読み終えた海旭に珍田は重々しく告げた。「ここだけの話にしてほしいが、近いうち日本はドイツと戦争になる。そうなったら君は敵性国民としてひどいめにあわされる」「ま、まさか日本とドイツが戦争になるとは……」と呟いた海旭に珍田は言った。

「これも内密に願っていたが、この間、ベルリン駐在のアメリカ大使から聞かされた。皇帝からこう言われと。『ドイツは近い将来イギリスと戦火を交える。なぜならばイギリスは白色人種の裏切り者だからであり、日本と結んだ同盟がなよりの証拠である。日本は中国に領土的野心を抱いているが、その後ろで糸を引いているのはイギリスである』」

珍田は猪口の酒を飲み干すと続けた。「イギリスと同盟を結んでいる日本とも戦争になるということだ。だから悪いことは言わん。即刻帰国したまえ。費用だったら私が用立てよう。四年前にシベリア鉄道ができてから日本へは二週間もあれば行けるようになった。満州に入ってからには太平洋がなんとかするだろう。君とは旧知らしいね」

太平洋とは北条太洋、海旭が留学前に参加した宗派を超えた若手の勉強会「経緯会」のメンバーで、それ以来の友人である。数か月前にも手紙をやりとりしたばかりだった。それにしても珍田がそのことを知っているとはい。どうも今回の件には何か大きな台本が隠されているようだ。だが、それがなんだか分からず、ますます不安をおぼえる海旭だった。

(つづく)

謹 賀 新 年

平成二十九年

浄土門主

總本山 知恩院

門跡第八十八世

伊 藤 唯 眞

大本山 増上寺

法主

八 木 季 生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高 橋 弘 次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福 原 隆 善

〒606・825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院

法主

真 野 龍 海

大本山善導寺
法主

阿 川 文 正

大本山光明寺
法主

柴 田 哲 彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七(二二)〇六〇三

大本山善光寺大本願

法主

鷹 司 誓 玉

〒380・0851長野市元善町五〇〇

謹 賀 新 年

平成二十九年

浄土宗宗務総長

豊岡 鏖 尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作
誕生寺

〒709 3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL 〇八六 (七二八) 二一〇二
FAX 〇八六 (七二八) 二一六二

(学)大乗淑徳学園
理事長

長谷川 匡俊

〒174 8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S.C.中等部高等部

理事長
校長
麻生 諦善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡
宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107 0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田 實雄

〒399 4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話 〇二六五 (八三) 一三三六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒112 0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話 〇三 (三三八) 四三七〇 (代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365 0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話 〇四八 (五四) 〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543 0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話 〇六 (六七七) 〇四四四

謹 賀 新 年
平成二十九年

九品阿彌陀如来

淨 眞 寺

〒158・0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

宮城県仙台市

じょうぎ
定義如来 西方寺

住職 大江田 紘義
前住職 大江田 博導

岩淵

天主山 正光寺

〒115・0041 東京都北区岩淵町三十二・十一

無縁寺

回 向 院

〒130・0026 東京都墨田区両国二・八・十
電話〇三 (三六三四) 七七七六

投込寺 淨閑寺

戸 松 秀 明

〒116・0003 荒川区南千住二・一・一二

古今伝授の寺

天主君山 願成寺

〒411・0022 静岡県三島市川原ヶ谷十八
メールマガジン info@ganjoji.com

塩竈市 雲上寺

東海林良雲

五劫山

愚鈍院

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・十二・十七

寿福山 寛慶寺

水 科 善 隆

〒380・0852 長野県長野市東之町四〇六番地
電話〇二六 (三三三) 一八二二

大吉寺住職

成 田 昌 憲

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22・4677・44・2695

謹賀新年

平成二十九年

護念山 称名寺

須藤隆仙

〒040-0055 北海道函館市船見町十八番十四号
電話〇一三八(二三)〇五七四

願行寺

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二,一,一二

森巖寺

加藤昌康

〒155-0002 世田谷区代沢三,二七,一

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四,二,二八
電話〇四六七(二三)〇七〇三
FAX〇四六七(二三)五〇五一

十八檀林霊場会
吞龍上人縁日(毎月八日)

蓮馨寺

住職 衆原恒久

〒350-0056 川越市連雀町七,一
電話〇四九(二三)〇〇四三
FAX〇四九(二三)〇六七六

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四,一二,八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一,五,一〇
電話〇三(三四四一)八三八四

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●街

〔特選〕

街灯り重きリュックに草の絮

内藤隼人

どこかへの登山かハイキングの帰路であろうか。似合わない街の明かりのなかに山男山女が立っている。リュックには草の絮がついたまま。珈琲でも飲んで別れるか、居酒屋で一杯やろうか、といった気分である。

〔佳作〕

色街に秋来る木花咲耶姫命

鳥羽 梓

秋旱車庫入れ下手な街宣車

相田 宗朗

信号を待つ街角に社会鍋

佐藤 雅子

●門

〔特選〕

虫時雨むかし少年院の門

染谷 愛

雑草の生い茂ったなかに半分崩れたような石の門が立っている。錆びて黒くなった鉄が飛び出している。容易に想像できるこの光景

は日本であるとも限らない。あたりはただ虫の鳴き声に満ちているだけである。

〔佳作〕裏門のような正門秋めきぬ

井口 栞

門限を破って大人になる九月

金井 楨

門灯に督促状を透かし秋

大森 吾郎

●自由題

〔特選〕撫子が牛乳瓶に活けてある

笠井 亜子

キッチンの横とか玄関ドア横の棚とか、花瓶が間に合わず、とりあえず牛乳瓶に活けた撫子がある。立派な花瓶もいいが、そのへんの瓶を利用してでも花を愛でたいという気持ちがい。昭和な気分である。

〔佳作〕予約客だけを待ちたる秋簾

小林 苑を

父も子も林屋三平すいっちゃん

斉田 仁

富士塚のてっぺん蟬の死にどころ

酒井 朱実



影絵自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会（編集部選）

■街

終電の窓に夜露の街明かり
朴落葉くるり日暮里間屋街
街宣車過ぎて秋日の伸びており
みずいろに秋封じ込めビルの街
重そうに鳩飛び上がる残暑の街

■門

茂吉茂太杜夫出でくる秋の門
門の一を外せり月の門
金魚売り雷門を素通りす
小さい秋来てラーメンに鳴門巻
国道二号関門トンネル夏終る

締切・二〇一七年二月二十八日
発表・『浄土』二〇一七年四月号
応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。
● 特選各1名・佳作各3名

● 葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

八月や九死一生輪禍かな
炎昼の大鉄球がビルを撃つ
盗品を西日の陰に並べおり
唐辛子振って負けん気だけ強い
門司港は川霧際か這う孤児も（回文）
友が来て西瓜をボンと叩くなり

長らく浄土誌上句会の選者をおつとめになられて来た増田河郎子先生が十二月一日急逝されました。浄土の法号は明譽賢聖著雄居士。行年八十八。

謹しんでここに哀悼の意を表します。 合掌。

編集部

さっちゃんはネッ

117 かい目

かまち♡ふしろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。
 福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞

(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞)

編集後記

目出度さも吹き飛ぶ風の強さかな 岱潤

今世界は、何処に向かつて歩き出そうとしているのでしょうか。

さまざまな国で政治の指導者が替わろうとしています。そして何処の国でも強い意見を言う人が台頭してきています。アメリカでは差別を鮮明に打ち出し、暴言を続けていたトランプ氏が大統領になろうとしています。フィリピンでは人権など考えないで麻薬撲滅運動を進めるドゥテルテ氏が人気を博しています。フランスでもポーランドでもドイツでも、極右といわれる女性がトップになろうとしています。

二十一世紀を人権の世紀と位置づけ、世界のグローバル化に向かって、共生と環境を見つめ、平和に向かつていた人類の歩みは急速にトーンダウンし、それぞれの国の保護主義が台頭して来ています。イギリスでは昨年国民投票によってEU離脱が決まりました。そして各国の首脳は皆、移民の入国制限を始めようとしています。理想主義を掲げていた政治家が消え、それぞれの本音を語りだし、世界大戦以前に還ろうとしているように思えてなりません。

二十一世紀冒頭人類が掲げた「人類と平和」というもつとも大事な理念が、軽んじられているように思えてならないの

です。仏教情報センターの基本理念は「人と、社会に、寄り添う仏教」です。仏教の教えを持って、弱者の側にたった姿勢、これが今我々に求められていることを確認したいと思います。
(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十三巻 一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十八年十二月二十日
発行 平成二十九年一月一日

発行人 佐藤良純
編集人 太室了皓

印刷所 株式会社 晚印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※ 消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがある。

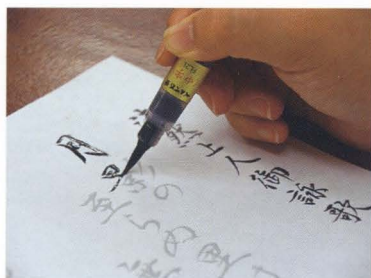


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。